

図画工作科授業研究体制の有効性と課題

—教員に対する聞き取り調査の SCAT 法を用いた質的分析を通して—

隅 敦

Effectiveness and Issues on the Organization of Lesson Study in "Art and Handicraft"

—from Qualitative Analysis "SCAT" of Interviews to Teachers—

Atsushi. SUMI

E-mail: sumi@edu.u-toyama.ac.jp

要 約

本研究は、図画工作科の授業研究の体制の有効性と課題について、明らかにしようとしたものである。まずの2年間の県の研究指定を受けた公立小学校を研究対象校とし、その授業研究の過程を整理した。次に研究対象校の美術科教員の免許状を持たない美術非専門の20歳代から50歳代の教員に対して、観点を定め聞き取り調査を行い整理した。その結果、図画工作科の教科に対する授業研究は、この教科観の確立に向けてより有効に働いていることが確認できた。そこでは、実技を伴う教材研究を同僚と行うことが効果的であることや、授業研究を経たことで教員が指導に対して自信を深めて行く過程も確認できた。一方で、大学における教員養成の段階で教科観に関わる指導が、授業研究の推進に資しているという事実が再認識できた。

キーワード：授業研究，教科観，図画工作科，学習指導要領，教員養成，現職教育，SCAT

keywords：Lesson study, The view of curriculum, Art and Handicraft Subject, Course of Study, Teacher Training, In-service Training, SCAT

はじめに

「図画工作科の授業は、学校行事の準備物をつくる時間になっている」、「図画工作科が授業参観の掲示物を作成するための時間になっている」、「教科書を全く使用しないで、学校行事に関わるものづくりのみを行った」。

臨時的任用教員として、約1年間小学校教育の現場において、図画工作科の指導に関する現実に直面した著者の勤務する大学学部卒業生の声である。正式採用された教員とは異なり、担任の教員が病休等で休んだ学級に充てられるため、即戦力として、その学校の体制に組み込まれている。特に、複数の学級のある学校においては、学年主任等他の学級に合わせる事が求められる。

一方、図画工作科の研究指定校に初任者として正式採用された卒業生は、共同で作成した教科書に掲載された題材を基に作成された学習指導案で授業をし、その学校における授業研究の体制中で与えられた役目を果たしていた。

小学校に勤務する教員の約8割は、図画工作科を自分で教えている事実¹からも、臨時的任用教員と言えども、全教科を指導することが前提としてあり、教科としての図画工作科を指導する責務から逃れることはできない。

本研究では、敢えて、図画工作科の研究指定を受けた小学校の2年間の取組に注目することにした。図らずも1年ないし2年間、図画工作科の授業研究を行うことが求められた美術非専門の教員の意識の変化に視点を当てて聞き取り調査を行った。

そこでは、授業研究を経験した美術非専門の教員の思いを丁寧に引き出すことで、指導に際する課題を把握し、どのように改善していけばよいのかについて、捉えるのが可能になると考えた。同時に、小学校教育の現場において図画工作科の指導を充実させるために求められる要件を整理し、大学の教員養成の段階における必要事項に言及することで、図画工作科の授業研究の体制の有効性と課題を明らかにしたいと考えた。

1. 「授業研究」を研究対象にすることの意義

(1) 授業研究の定義

教育関係法令²で教育公務員は「絶えず研究と修養に努めなければならない」とある。また、平成20年1月の中央教育審議会答申³によってもその必要性は強調されている。児童生徒に教える内容について事前に調べ教材研究を行うことは、教員として教壇に立つ際の大前提であり、学校で行われる授業は、教員の研修の上に成り立っていると言っても過言ではない。

豊田ひさきは、授業研究を次のように定義⁴している。「・授業の改善に向けて、日々教師が学校現場で実践している授業実践を分析・研究の対象とする。・校内の同僚の教師たちが授業を互いに見合う。・板書の仕方、発問の仕方、指名の仕方といった片々の指導方法から、当の授業の教育内容や教材の吟味、さらには、そのときめざされた教育目標の検討まで射程範囲に入れる。・以上の過程全体を授業研究にとらえ、共同で授業のカンファレンスを行う」。

日本の授業研究は1920年代から行われており、100年以上の歴史を持つ⁵にも関わらず、学校教育の現場では、それは当然のこととして受けとめられ、日本独自のスタイルが次第に確立されてきた。

1990年代の末になって、アメリカのスティグラーとヒーバートの「Lesson Study」の研究⁶をきっかけにして、世界的に注目を受けることになった。スティグラーとヒーバート⁷は、1990年代に広島県の小学校で取り組まれた算数の校内授業研究の様子を取材し日本の授業研究のシステムに注目し、それを以下のようにまとめている。

①Defining the Problem (問題の定義の段階)
②Planning the Lesson (授業の計画) ③Teaching the Lesson (授業)
④Evaluating the Lesson and Reflecting on its Effect (授業の評価とその効果に関する研究)
⑤Revising the Lesson (授業の修正)
⑥Teaching the Revised Lesson (修正した授業をもう一度行う)
⑦Evaluating and Reflecting, Again (再び評価と反省)
⑧Sharing the Result (結果の共有)

(2) 「授業研究」を対象にした研究の分類

研究対象とされた授業研究は姫野完治によると、①「学校組織や教師の文化に関する研究」と、②「教師の力量向上策としての校内授業研究」に分類⁸される。①は、既存の組織や文化を批判的に捉えその

解明に力点を置いているという。②は、組織としての学びの良さを積極的に捉え、促進するためのモデルや手立ての開発に力を注いでいるという。本研究は、後者の研究に相当し、図画工作科という教科にとって授業研究がどのような役割を果たすのかについて、検証しようと試みるものである。

(3) 図画工作科・美術科における授業研究のあり方について取り上げた先行研究

図画工作科及び美術科の授業研究のあり方そのものを対象にした研究は、美術科教育学会学会誌である「美術教育学」によると、竹内博の研究⁹と安東恭一郎の研究¹⁰が挙げられる。

竹内は、「授業研究は、実践の学である。実践の学であるためには研究方法の確立が急務である」とし、「実践を理論化し一般化する方法論」を持たなければならないとし、そのためにそれまでの美術教育において明確ではなかった観念¹¹としての「学習診断」についての研究を行っている。安東は、「美術の授業研究を美術教育研究の方法論として基礎付けていくこと」を目的としているが、「事実学」として授業研究を見直すことを提唱している。

これらの研究は、いずれも授業研究の重要性を説いたものであるが、美術教育の専門学会において発表された内容であり、美術教育における授業研究に特化した内容になっている。竹内の研究における「作品主義」¹²の問題や、安東が取り上げた「美術の授業」に特化した授業研究を深める内容では、教科として存在する図画工作科や美術科を指導する教員に専門的な資質が求められることになる。美術非専門の教員が存在しない小学校においては、そもそも授業研究を対象にした研究自体成立しないことになる。

本研究はあくまでも、授業研究の位置づけとして行われた「図画工作科」を研究対象にしていくことにする。

2. 研究対象校における図画工作科の授業研究の概要

(1) 研究対象校における図画工作科の授業研究

本研究における研究対象校は、平成23年度・24年度にA県小学校教育研究会の図画工作科の研究指定を受けていた小学校である。研究を行った2年間には中学校の美術科の教員免許状を有している教員は、一人も存在していなかった。

研究対象校における図画工作科の授業研究は、授業提供者の存在する同学年部会が中心になり、低中高と3つの部会に分かれて推進される。特別支援学級の教員は、そのクラスの対象児童の所属する部会に参加することになる。

まず、授業提供者を中心に題材を選び、その題材で取り上げた制作物の部会で試作を行う。次に授業提供者が中心になり学習指導案を作成し、同学年及び、隣学年の部会で検討する。第1案の学習指導案が作成されると、試行の授業¹³を、同学年の他クラスで行う。その後、授業の研究協議を開催する。ここでは、学習指導案の見直しを図ると共に、授業を行う教室の環境設定、板書、場合によっては、必要な材料使用法に至るまで見直しが行われる。対象校では、特に研究の視点について、本時にどのように下ろしていくのかについて何度も検討を重ねている。

公開授業研究会に向けての授業研究と、途中の指導訪問時に合わせた授業研究に向けて、低中高学年部会で、平成23年度に3回、平成24年度に2回の授業研究が行われた。この授業研究を核にして、学習指導案の検討を行い試行の授業を繰り返しながら授業研究を行っていた。

(2) 研究対象校の授業研究の流れ

研究対象校における図画工作科の校内授業研究の流れを、スティグラーとヒーバートの定義した授業研究のサイクルと重ね合わせてみた。

①問題の定義の段階

- ・研究テーマの確認と、授業研究用の題材の決定・同学年部会による教材研究（教科書掲載作品の試作）による問題点の把握

②授業の計画

- ・学習指導案の作成・材料集め、用具の確認

③授業

- ・同学年教員による同一指導案による授業実施

④授業の評価とその効果に関する研究

- ・隣学年部会による授業検討会

⑤授業の修正

- ・学習指導案の見直し、及び、材料コーナーや作り方説明コーナーの設置

⑥修正した授業をもう一度行う

- ・研究発表大会における同学年教員による見直し指導案による授業実施

⑦再び評価と反省

- ・研究発表大会における地区内図画工作科部所属教

員参加による研究協議会

⑧結果の共有

- ・研究記録の編集
- ・次年度の研究に向けての課題決定

このように、教科は異なるが、授業研究のサイクルとしては、概ね同等に捉えられることが分かった。外部の研究者が授業研究のテンプレートとして示した内容に準じていることで、特に研究対象校における授業研究が特殊なものでないことが確認できた。

3. 聞き取り調査の概要

聞き取り調査は、平成24年8月から9月にかけて、筆者が研究対象校に出向いて、音声記録データを一人約30分ほど得た。本調査で取り上げるのは20歳代、30歳代、40歳代、50歳代の1名ずつの教員のデータである。

(1) 質問の内容

構造化面接の手法で、予め用意した次の内容の質問を行った。

①図画工作科の指導におけるレディネスについて

ア. 大学時代、イ. 教員になってから、ウ. 学習指導案の作成について、エ. 取得している他の教科の免許状、オ. 図画工作の授業を行う際に感じる抵抗感

②図画工作科という教科に対する印象について

ア. 教科観について、イ. 一番大切だと思う評価観点、ウ. 評価に関する困難点

③授業研究のシステムについて

ア. 同僚と授業研究を行うことについて、イ. 図画工作科の他、授業教科の授業研究との相違点、ウ. 図画工作科の授業研究の困難点

④その他図画工作科について考えていること

この教科について再発見したことなど

(2) 分析の方法

分析は、質的研究調査で使用されるグランデッドセオリーに基づくSCAT (Steps for Coding and Theorization)¹⁴を用い、まず、言語データをセグメント化し、次のコードを考案していった。最初に「データの中の着目すべき語句を抽出」し、次に「それを言い換えるためのデータ外の語句」を考え、さらに、「それを説明するための語句」を挙げていく。そして、「そこから浮き上がるテーマ・構成概念」を整理し、最後に、「そのテーマや構成概念を紡いでストーリー・ラインと理論を記述する手続き」をとっていく手法である。

20代A教諭に対する聞き取り調査のSCAT法による分析

発話者	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外の内容	<4>テーマ・構成概念
聞き手発話1	1 図画工作科の指導におけるレディネスについて (大学時代)				
A教諭発話2	大学で図画工作科教育論を受講した。よく覚えていることはたくさん教材研究をしたこと。外へ出たのははっぱを使って行った内容。ブラックライト使った内容、木材を切って釘で打った内容。自分で写真をとって、レポートを書いたので覚えている。プレゼンの理論の内容も指導要領などを覚えている。	図画工作科教育論, たくさん教材研究, 自分で写真をとって, レポートを書いた, プレゼンの理論の内容	図画工作科の必修講義, プレゼンでの図画工作科の理論説明, 多くの教材研究とレポート作成	大学における図画工作科講義の充実の有効性	大学の講義において実技と理論を学ぶことの意義
聞き手発話3	1 図画工作科の指導におけるレディネスについて (教員になってから)				
A教諭発話4	出張とかではなかった。昨年は図工部会ではなく国語部会。	出張とかではなかった, 国語の部会	初任者研修では行われない図画工作科, 市の小学校教育研究会における他部会への参加	研修機会の少ない図画工作科という教科	初任者の研修機会欠如
聞き手発話5	1 図画工作科の指導におけるレディネスについて (学習指導案の作成について)				
A教諭発話6	教員になってからは今年の要請訪問が初めて。大学の時に一回書いたことがあるが、昨年の授業研究のことが元になっている。自分ではうまく書けたかどうか分からないが、頑張っている。	要請訪問, 大学時代に一度, 昨年の授業研究を元に, 頑張った	大学時代に講義中の指導案よりも, 実際の研修の書かれた指導案が元にして教育委員会の訪問で初めて書いた正式な指導案	学校教育現場における授業研究での指導案の大切さ	研修の体制に組み込まれてこそ, 実現する学習指導案作成の機会
聞き手発話7	1 図画工作科の指導におけるレディネスについて (副免許は何か)				
A教諭発話8	家庭科。研究室は教師教育のゼミから教育法のゼミに移った。	家庭科, 教師教育学のゼミから教育行政学のゼミ	副免許は家庭科を取得し, 卒業論文は, 教育法のゼミで執筆	小学校における副免許の多様性, 無関係な専門性	オールマイティな教科指導力を求められる小学校現場
聞き手発話9	1 図画工作科の指導におけるレディネスについて (図画工作の授業を行う際に抵抗感(とまどい)を感じたことは何か?)				
A教諭発話10	昔から結構、図画工作科というのに苦手意識をもっていた。絵が苦手、手先も器用ではなかった。自分でもうまくできないのにこの子達に教えられるのかという気持ちがあった。	昔から, 図画工作科に対する苦手意識がある, 自分もうまくできないのに子ども達に教えられるか	図画工作科の指導に対する自信の欠如	図画工作科指導に対する根強い実技優先の風潮	自身の技能に対する苦手意識から指導に不安を感じる教員の存在
聞き手発話11	2 図画工作科の教科に対する印象・考え(教科観)について(学力をつける教科という認識があるか)				
A教諭発話12	教室の環境作りも、図工もやっているという点で他の教科と同じようにばんばんやっている。指定を受けていない他の学校に行っていたらどうだったかなということはある。大学で習ったことが今につながっている。	教室の環境作り, 他の教科同様, 指定を受けていない他の学校, 大学で習ったことがつながっている	研究指定校に着いたことで生きる大学での既習事項, 図画工作科を教科として認識した教室掲示作成	大学における図画工作科の指導内容の実践における確認	教員養成段階における図画工作科の教科観について指導の重要性認識
聞き手発話13	2 図画工作科の教科に対する印象・考え(教科観)について (4観点の中で一番大切だと思う観点)				
A教諭発話14	「造形への関心・意欲・態度」はそれがないと図工の授業にならない。自分が苦手だったので、苦手でも関心意欲があれば楽しくできる。題材自体「ならべて、つんで」が1年生の子どもたちにとってわくわくするものだったのか、喜んでいたし楽しんでくれた。結構うちのクラスは、他のクラスよりもダイナミックな感じで、箱とか全部なくなってしまう。	「造形への関心・意欲・態度」, 苦手でも関心意欲があれば楽しくできる, 結構うちのクラスは, ダイナミック, 題材自体「ならべて、つんで」が1年生の子ども達にとってわくわくするものだったのか, 喜んでいたし楽しんでくれた。	「造形への関心・意欲・態度」が育つと, 大胆な表現につながるという事実	造形遊びの題材の持つ魅力	造形遊びの題材の魅力が「造形への関心・意欲・態度」を育てるということを授業研究を通して実感

図画工作科授業研究体制の有効性と課題

聞き手 発話15	2 図画工作科の教科に対する印象・考え(教科観)について(評価で難しいと思うことは何か)				
A教諭 発話16	手持ちのビデオで記録することはやってみた。どこを写したかは分からないけれど。自分の声も入っていた。	手持ちのビデオで記録, 自分の声	動画記録による児童の動きに対する教師の発話	造形遊びの評価資料収集の手法としての動画撮影	造形遊びの評価資料収集のための動画による撮影の試み
聞き手 発話17	3 授業研究のシステムについて(同僚と授業研究を行うことについて その効果を感じているか否か, その理由)				
A教諭 発話18	初めてだったので, そうなのかという感じはあった。中学年部会, 高学年部会という感じでアイデアを出し合って, ヘチマの題材もやって, 青い布をかぶせた鑑賞コーナーもつくった。そういう協力体制はすごいなと思った。	初めてだった, アイデアを出し合って, 鑑賞コーナー, 協力体制はすごいな	授業に必要な準備, 共同で考え実行, 連携の素晴らしさ	一人では限界がある授業研究	授業研究を行って初めて分かる共同研究の意義
聞き手 発話19	3 授業研究のシステムについて(図画工作科の授業研究と他の教科の授業研究について 同じだと思うか)				
A教諭 発話20	算数のような教科と特に違うとは思わない。	算数のような教科, 特に違わない	他の教科と同等	図画工作科の教科としての認識	授業研究を通して算数などの他教科と同様な教科としての認識
聞き手 発話21	3 授業研究のシステムについて(授業研究を行う上で現在難しいと考えていること)				
A教諭 発話22	指導案を書いている段階では心配だった。子ども達がどんな反応をするのか, 飽きてこないのか, 時間配分, 材料のこととか。自分がやってみたときには, ただ並べてみたり高く積んでみたりするだけだったので。他のクラスを見ていても, プリンカップにヤクルトの容器を入れて, またプリンカップを重ねていた。他のクラスにあったのは, ペットボトルにトイレトペーパーの芯を差し込んだりだったが, 箱の上にペットボトのキャップを敷き詰めてその上に箱を置いたり, ペットボトルの層と箱の層ができていた。	指導案を書いている段階では心配, ただ並べてみたり高く積んでみたりするだけ, 他のクラスにあった	授業研究の本番への不安感, 他クラスとの児童の造形行為の相違点	学習指導案通りに授業を進めることへの不安感	造形遊びの授業研究の指導案執筆者になったことでの児童の造形行為の予想の困難さ
聞き手 発話23	4 その他 図画工作科について考えていること				
A教諭 発話24	図工の工作をする際に見本をつくるために自分でやってみたら楽しいと分かる。	工作をする際に, 自分でやってみたら, 楽しい	ものづくりの授業の前に, 教材研究で予め教師が試すと, 喜びを感じる	教材研究で試作をすることで可能な児童理解	教材研究における試作の重要性認識
ストーリー・ ライン	本教諭は, 教職経験2年目の20代である。大学の講義において実技と理論を学ぶことの意義について, それが現任教における授業研究と結びついていることで実感している。したがって, 図画工作科という教科に対しても学部レベルにおける教科観についての指導が重要であることを認識している。研修の体制に組み込まれてこそ学習指導案作成の機会が与えられると考えられるが, 初任者研修においては, 他教科が優先されることから, その研修機会が欠如していると捉えている。自身の副免許は家庭科であるが, オールマイティな教科指導力を求められる小学校現場としては, 授業研究を通して算数などの他教科と同様に教科としての図画工作科の認識を高めていると言える。さらに, 題材の試作を同学年で行うことで, その題材を理解し面白さがあることを知り, 共同研究の意義を感じている。自身の技能に対する苦手意識から指導に不安を感じてきたが, 造形遊びの題材の魅力が「造形への関心・意欲・態度」を育てるということを実感しており, 動画による造形遊びの評価資料収集法などを試みるようになっていく。				
理論的 記述	ストーリー・ラインから抜き出して, 2つの端的な表現にまとめた。 ・大学における図画工作科の実技指導及び理論指導内容が小学校の図画工作科の研究指定校の研究に生かされる。 ・図画工作科の実技に自信のない教員でも, 教材研究において事前に共同で題材を作成したり, 学習指導案を立案したりすることによって, この教科の指導に対する自信を深めることができる。				
さらに追 究すべき 点・課題	・初任者研修で, 図画工作科のみ指導に関する内容が全くないのか。 ・初任者研修において研修が実施される教科の研修内容は, 図画工作科の授業に生かせるものではないのか。				

なお、SCAT はダウンロード数が2013年9月末までに 5,285件を超えており¹⁵、社会学はもとより、教育学や医学や歯学、看護学を含めて幅広い研究分野での活用が行われている。

4. 実際の聞き取りデータを用いたコーディング例

実際に大谷が示した事例¹⁶を基に研究対象校の教員にインタビューを行ったデータ¹⁷を挙げて、分析の方法を紹介する。

(1) データについて

以下に挙げる聞き取り対象は、新規採用され勤務年数2年目の20歳代のA教員である。

(2) 発話2のコーディング

表中の発話2を以下に挙げる。

A 大学で図画工作科教育論を受講した。よく覚えていること。たくさん教材研究をしたこと。外へ出てはっぱを使って行った内容。ブラックライトを使った内容。木材を切って釘で打った内容。自分で写真をとって、レポートを書いたので覚えている。プレゼンの理論の内容も指導要領などを覚えている。

これに対して、①テキスト中の注目すべき語句として、「図画工作科教育論、たくさん教材研究、自分で写真をとって、レポートを書いた、プレゼンの理論の内容」を抽出した。

次に②テキスト中の語句の言いかえとして、「図画工作科の必修講義、プレゼンでの図画工作科の理論説明、多くの教材研究とレポート作成」を挙げている。

そして、③②を説明するようなテキスト外の内容として、「大学における図画工作科講義の充実の有効性」を挙げている。

最後に④テーマ・構成概念として、「大学の講義において実技と理論を学ぶことの意義」を挙げている。

(2) 発話4のコーディング

発話4のコーディングは以下のとおりである。「出張とかではなかった。去年は図工部会ではなく国語部会」

まず、①テキスト中の注目すべき語句として、「出張とかではなかった、国語部会」を抽出した。

次に、②テキスト中の語句の言いかえとして、「初任者研修では行われない図画工作科、市の小学校教育研究会における他部会への参加」を挙げた。

そして、③②を説明するようなテキスト外の内容として、「研修機会の少ない図画工作科という教科」を挙げた。

最後に④テーマ・構成概念として、「初任者の研修機会欠如」を挙げている。

発話4については、⑤疑問・課題として、「初任者研修で、図画工作科のみ指導に関する内容は全くないのか。逆に何の研修があるのか」を挙げている。

(3) 発話6のコーディング

発話4のコーディングは以下のとおりである。「教員になってからは今年のを要請訪問が初めて。大学の時に一回書いたことがあるが、去年の授業研究のことが元になっている。自分ではうまく書けたかどうか分からないが、頑張ってた」

まず、①テキスト中の注目すべき語句として、「要請訪問、大学時代に一度、去年の授業研究を元に、頑張った」を抽出した。

次に②テキスト中の語句の言いかえとして、「大学時代に講義中の指導案よりも、実際の研修の書かれた指導案が元にして教育委員会の訪問で初めて書いた正式な指導案」を挙げている。

そして、③②を説明するようなテキスト外の内容として、「学校教育現場における授業研究での指導案の大切さ」を挙げている。

最後に④テーマ・構成概念として、「研修の体制に組み込まれてこそ、実現する学習指導案作成の機会」を挙げている。

(4) 発話8のコーディング

「家庭科。研究室は教師教育学のゼミから教育行政学のゼミに移った」

まず、①テキスト中の注目すべき語句として、「家庭科、教師教育のゼミから教育法のゼミ」を抽出した。

次に、②テキスト中の語句の言いかえとして、「副免許は家庭科を取得し、卒業論文は、教育法のゼミで執筆」を挙げている。

そして、③②を説明するようなテキスト外の内容として、「小学校における副免許の多様性、専門性と無関係な校務分掌」を挙げている。

最後に④テーマ・構成概念として、「オールマイティな教科指導力を求められる小学校現場」を挙げている。

(5) 発話10のコーディング

「昔から結構、図画工作科というのに苦手意識を

もっていた。絵が苦手、手先も器用ではなかった。自分でもうまくできないのにこの子たちに教えられるのかという気持ちがあった」

まず、①テキスト中の注目すべき語句として、「昔から、図画工作科に対する苦手意識がある、自分もうまくできないのに子どもたちに教えられるか」を抽出した。

次に、②テキスト中の語句の言いかえとして、「図画工作科の指導に対する自信の欠如」を挙げている。

そして、③②を説明するようなテキスト外概念として、「図画工作科指導に対する根強い実技優先の風潮」を挙げた。

最後に④テーマ・構成概念として、「自身の技能に対する苦手意識から指導に不安を感じる教員の存在」を挙げた。

(6) 発話12のコーディング

「教室の環境作りも、図工もやっているという点で他の教科と同じようにばんばんやっている。指定を受けていない他の学校に行っていたらどうだったかなという思いはある。大学で習ったことが今につながっている」

まず、①テキスト中の注目すべき語句として、「教室の環境作り、他の教科同様、指定を受けていない他の学校、大学で習ったことがつながっている」を抽出した。

次に、②テキスト中の語句の言いかえとして、「研究指定校に着いたことで生きる大学での既習事項、図画工作科を教科として認識した教室掲示作成」を挙げている。

そして、③②を説明するようなテキスト外概念として、「大学における図画工作科の指導内容の実践における確認」を挙げている。

最後に④テーマ・構成概念として、「学部レベルにおける図画工作科の教科観について指導の重要性認識」を挙げている。

(7) 発話14のコーディング

『造形への関心・意欲・態度』はそれがないと図工の授業にならない。自分が苦手だったので、苦手でも関心意欲があれば楽しくできる。題材自体「ならべて、つんで」が1年生の子どもたちにとってわくわくするものだったのか、喜んでいたし楽しんでもいた。結構うちのクラスは、他のクラスよりもダイナミックな感じで、箱とか全部なくなってしまっ

た」

まず、①テキスト中の注目すべき語句として、『造形への関心・意欲・態度』、苦手でも関心意欲があれば楽しくできる、結構うちのクラスは、ダイナミック、題材自体「ならべて、つんで」が1年生の子ども達にとってわくわくするものだったのか、喜んでいたし楽しんでもいた」を抽出した。

次に、②テキスト中の語句の言いかえとして、『造形への関心・意欲・態度』が育つと、大胆な表現につながるという事実」を挙げている。

そして、③②を説明するようなテキスト外概念として、「造形遊びの題材の持つ魅力」を挙げている。

最後に④テーマ・構成概念として、「造形遊びの題材の魅力が『造形への関心・意欲・態度』を育てるということを授業研究を通して実感」を挙げている。

(8) 発話16のコーディング

「手持ちのビデオで記録することはやってみた。どこを写したかは分からないけれど、自分の声も入っていた」

まず、①テキスト中の注目すべき語句として、「手持ちのビデオで記録、自分の声」を抽出した。

次に、②テキスト中の語句の言いかえとして、「動画記録による子どもの動きに対する教師の発話」を挙げている。

そして、③②を説明するようなテキスト外概念として、「造形遊びの評価資料収集の手法」を挙げている。

最後に④テーマ・構成概念として、「動画による造形遊びの評価資料収集法の試み」を挙げている。

(9) 発話18のコーディング

「初めてだったので、そうなのかという感じはあった。中学年部会、高学年部会という感じでアイデアを出し合って、ヘチマの題材もやって、青い布をかぶせた鑑賞コーナーもつくった。そういう協力体制はすごいなと思った」

まず、①テキスト中の注目すべき語句として、「初めてだった、アイデアを出し合って、鑑賞コーナー、協力体制はすごいな」を抽出した。

次に、②テキスト中の語句の言いかえとして、「授業に必要な準備、共同で考え実行、連携の素晴らしさ」を挙げている。

そして、③②を説明するようなテキスト外概念

として、「一人では限界がある授業研究」を挙げている。

最後に④テーマ・構成概念として、「授業研究を行って初めて分かる共同研究の意義」を挙げている。

(10) 発話20のコーディング

「算数のような教科と特に違うとは思わない」

まず、①テキスト中の注目すべき語句として、「算数のような教科、特に違わない」を抽出した。

次に、②テキスト中の語句の言いかえとして、「他の教科と同等」を挙げている。

そして、③②を説明するようなテキスト外の内容として、「図画工作科の教科としての認識」を挙げている。

最後に④テーマ・構成概念として、「授業研究を通して算数などの他教科と同様に教科としての図画工作科の認識」を挙げている。

(11) 発話22のコーディング

「指導案を書いている段階では心配だった。子どもたちがどんな反応をするのか、飽きてこないのか、時間配分、材料のこととか。自分がやってみただけには、ただ並べてみたり高く積んでみたりするだけだったので。他のクラスを見ていても、プリンカップにヤクルトの容器を入れて、またプリンカップを重ねていた。他のクラスにあったのは、ペットボトルにトイレットペーパーの芯を差し込んだりだったが、箱の上にペットボトルのキャップを敷き詰めてその上に箱を置いたり、ペットボトルの層と箱の層ができていた」

まず、①テキスト中の注目すべき語句として、「指導案を書いている段階では心配、子どもたちの反応、材料のこと、自分はただ並べてみたり高く積んでみたり」を抽出した。

次に、②テキスト中の語句の言いかえとして、「準備段階の予想と異なる授業における子どもの反応」を挙げている。

そして、③②を説明するようなテキスト外の内容として、「子どもの表現の多様性の可能性」を挙げている。

最後に④テーマ・構成概念として、「学習指導案を立てるからこそ分かる子どもの表現の多様性と表現内容の豊かさ」を挙げている。

(12) 発話24のコーディング

「図工の工作をする際に見本をつくるために自分でやってみたら楽しいと分かる」

まず、①テキスト中の注目すべき語句として、「図工の工作、見本、自分で、楽しい」を抽出した。

次に、②テキスト中の語句の言いかえとして、「教師の試作で教材のよさを知る」を挙げている。

そして、③②を説明するようなテキスト外の内容として、「教材研究の必要性」を挙げている。

最後に④テーマ・構成概念として、「題材の試作を行うことによって得られる題材に対する理解と面白さ」を挙げている。

(13) ストーリー・ラインの記述

以上のようにコーディングを行った上で、特に以上の④を抜き出して再度掲載する。

・大学の講義において実技と理論を学ぶことの意義
・初任者においては、ほとんどの研修機会の欠如
・研修体制に組み込まれてこそ、実現する学習指導案作オールマイティな教科指導力を求められる小学校現場の機会
・自身の技能に対する苦手意識から指導に不安を感じる教員の存在
・学部レベルにおける図画工作科の教科観についての指導の重要性
・造形遊びの題材の魅力が「造形への関心・意欲・態度」を育てるということを授業研究を通して実感
・動画による造形遊びの評価資料収集法に試み
・授業研究を行って初めて分かる共同研究の意義
・授業研究を通して算数などの他教科と同様に教科としての図画工作科の認識
・学習指導案を立てるからこそ分かる子どもの表現の多様性と表現内容の豊かさ
・題材の試作を行うことによって得られる題材に対する理解と面白さ

本研究では、聞き取り調査は予め質問を用意してそれぞれの項目に回答を得るようにしたが、その回答の中には、質問事項と異なる他の項目に関わる内容が含まれている場合があった。そこで、以下のように「大学」、「授業研究」、「教科観」、「児童理解」の4つのキーワードごとに整理した。

①大学 ・大学講義において実技と理論を学ぶことの意義
・学部レベルにおける図画工作科教科観についての指導の重要性認識

②授業研究 ・初任者においては、ほとんど研修機会が欠如
・研修の体制に組み込まれてこそ実現する学習指導案作成の機会
・オールマイティな教科指導力を求められる小学校現場
・授業研究を行って初めて分かる共同研究の意義
・授業研究を通し

て算数などの他教科と同様に教科としての図画工作科の認識 ③教科観・自身の技能に対する苦手意識から指導に不安を感じる教員の存在 ・造形遊びの題材の魅力が「造形への関心・意欲・態度」を育てるということを授業研究を通して実感? ・動画による造形遊びの評価資料収集法に試み ・題材の試作を行うことによって得られる題材に対する理解と面白さ?

④児童理解 ・学習指導案を立てるからこそ分かる子どもの表現の多様性と表現内容の豊かさ

そして、以下のようなストーリー・ラインを作成した。

本教諭は、教職経験2年目の20代である。大学の講義において実技と理論を学ぶことの意義について、それが現任校における授業研究と結びついていることで実感している。したがって、図画工作科という教科に対しても学部レベルにおける教科観についての指導が重要であることを認識している。研修の体制に組み込まれてこそ学習指導案作成の機会が与えられると考えられるが、初任者研修においては、他教科が優先されることから、その研修機会が欠如していると捉えている。自身の副免許は家庭科であるが、オールマイティな教科指導力を求められる小学校現場としては、授業研究を通して算数などの他教科と同様に教科としての図画工作科の認識を高めていると言える。さらに、題材の試作を同学年で行うことで、その題材を理解し面白さがあることを知り、共同研究の意義を感じている。自身の技能に対する苦手意識から指導に不安を感じてきたが、造形遊びの題材の魅力が「造形への関心・意欲・態度」を育てるということを実感しており、動画による造形遊びの評価資料収集法などを試みるようになっていく。

(14) 理論的記述

ストーリー・ラインから抜き出して、2つの端的な表現にまとめた。

・大学における図画工作科の実技指導及び理論指導内容が小学校の図画工作科の研究指定校の研究に生かされている。

・図画工作科の実技に自信のない教員でも、教材研究において事前に共同で題材を作成したり、学習指導案を立案したりすることによって、この教科の指導に対する自信を深めることができる。

(15) さらに追究すべき点・課題

⑤の記述とその他

・初任者研修で、図画工作科のみ指導に関する内容が全くないのか。

・初任者研修において研修が実施される教科の研修内容は、図画工作科の授業に生かせるものではないのか。

以上のように、新規採用2年目の教員の聞き取り調査の結果を整理して、コーディングの流れを整理し、ストーリー・ラインを記述するに至る流れをまとめた。

5. 他の年代の教員の聞き取り調査から構成したストーリー・ラインから

次に、20歳代A教諭と同様な方法で、分析した30歳代B教諭、40歳代C教諭、50歳代D教諭の教員を一人ずつ取り上げて、ストーリー・ラインと理論的記述を以下に挙げる。

(1) 30歳代B教諭

①ストーリー・ライン

本教諭は、教職13年目の30歳代である。教育学部ではなく体育専門の学部を卒業し、中学校及び高等学校の体育教員の免許状を有している。小学校教員免許は、通信教育で取得しており、そのスクーリングにおいて図画工作科の実技内容が充実しており、それが造形遊びであったことも認識している。図画工作科の研修については、描画法の研修以外に自分が取り組みたい時期に適当なものがないことで参加したこと経験がない。授業研究を経てその問題点を認識している。また、授業研究を行う上で事前に題材の試作を行うことの意義を把握している。

授業研究における教科間の差異が存在することを実感しておらず、表現教科である体育科と同様に技能既習事項の蓄積の重要性を認識している。評価の観点については「造形への関心・意欲・態度」が他の3観点に影響を及ぼしているという認識をしており、目標と評価の位置づけの重要性を確認している。また、表現の結果としての作品のみの評価の問題点を把握している。したがって、授業研究の授業提供者としての経験を通しての教科観の確立が図れていると言える。授業研究のシステムが児童理解の促進や指導面でも有効であることも把握している。

②理論的記述

* 通信教育で受けた指導内容によって図画工作科指導のレディネスが形成されている。

* 実技系の教科の授業研究を経験することで、図画工作科の教科観が形成されている。

* 評価方法については、児童の活動中の評価資料の収集について困難さが残るを感じている。

* 児童に対する理解や指導面でも有効であることを認識している。

(2) 40歳代C教諭

①ストーリー・ライン

本教諭は、教職経験22年目の40歳代である。大学時代においては実技指導のみの記憶にも関わらず、10年前に勤務した小学校が図画工作科の研究指定を受け、本人は授業者に当たったことにより、校内はもとより校外での研修の機会も得て、図画工作科を、学力をつける教科であると認識をしている。また、その後も他の教科の研究指定も受けて授業提供者も経験していることから、授業研究そのもののシステムについても十分把握しているし、国語の免許を取得しながらも、図画工作科の研究を行わなければならない現実に対しても抵抗を感じていない。そして、授業研究体制の整備された学校のよさを実感している。ただし、現任校以前の経験として、研究期間中に研究課題を十分達成できなくても、期間が終わった時点で研究成果にまとめてしまうことに対して問題を感じている。この教科に対しては、授業研究を通して、「造形への関心・意欲・態度」の大切さを認識し、授業研究の経験を通して、鑑賞の評価の困難さを一層認識している。共同での試作づくりを通して、授業における児童の活動の予測ができる点など、図画工作科と他教科との違いを感じていない。図画工作科の研究指定を受けることによって、互いに認め合える児童の存在する学級づくりができると考えている。

②理論的記述

* 他の授業研究と合わせた2度目の図画工作科の研究指定校勤務の経験が図画工作科の教科観を形成している。

* 学力をつける教科としての意識が高いことで評価の観点に対する自らの目標を高く設定している。

* 授業研究を行ってきたことで、図画工作科指導における問題点や課題について追究する力が養われている。

* 図画工作科の授業研究を児童理解や学級づくりにまでつないで考え、肯定的に受けとめている。

(3) 50歳代D教諭

①ストーリー・ライン

本教諭は教職経験29年目の50歳代である。大学における実技指導は、絵画の実技を行ったことをかすかに覚えている。教材研究の幅を広げるために教材店が主催して行う実技講習会に自主的に参加して、その成果を授業で生かしてきた。図画工作科の授業研究については、免許を有する理科を中心に他教科の授業研究を多数経験してきており、オールマイティな指導力を有する。学習指導案執筆には十分熟達しており、その成果を図画工作科に生かした経験もある。しかし、自己の表現に対する自信のなさが、図画工作科指導における評価の自信のなさに通じているようである。教科書内容の見直しの果たす役割の大きさを授業研究を通して感じており、図画工作科では、技能面が支える表現という認識を抱いている。予想以上に児童理解が進むことにこの教科を研究する醍醐味を感じており、さらに、授業研究を行うことで児童の意欲が高揚することを認識している。

②理論的記述

* 自主的な研修の積み重ねによって図画工作科に対する理解を深めている。

* これまでの他教科の授業研究参加の経験や学習指導案執筆の経験が現任校における授業研究にも生かされている。

* 自己の表現技能の自信のなさに起因する評価に対して不安を抱いている。

* 学力をつける教科としての教科書の見直しの有効性を認識している。

6. 4教諭の理論的記述のまとめ

次に、20歳代から50歳代までの4教諭の理論的記述から、類似している項目を集めて、考察を行う。

(1) 大学における講義について

* 大学における図画工作科の実技指導及び理論指導内容が小学校の図画工作科の研究指定校の研究に生かされている。(20歳代A教諭)

* 通信教育で受けた指導内容によって図画工作科指導のレディネスが形成されている。(30歳代B教諭)

大学における図画工作科の理論と実技の指導を充実させることが重要であることが分かる。

* 自主的な研修の積み重ねによって図画工作科に対

する理解を深めている。(50歳代 D 教諭)

D 教諭のように教職経験が長くなると自主的な研修を経験してきたが故に意義があることが分かる。

(2) 授業研究について

* 実技系の教科の授業研究を経験することで、図画工作科の教科観が形成されている。(30歳代 B 教諭)

* 授業研究を行ってきたことで、図画工作科指導における問題点や課題について追究する力が養われている。(40歳代 C 教諭)

* 他の授業研究と合わせた2度目の図画工作科の研究指定校勤務の経験が図画工作科の教科観を形成している。(40歳代 C 教諭)

* これまでの他教科の授業研究参加の経験や学習指導案執筆の経験が現任校における授業研究にも生かされている。(50歳代 D 教諭)

以上の記述から図画工作科と他教科の授業研究の成果が補完し合うことで、一層研究成果が上がる事が分かる。

* 図画工作科の実技に自信のない教員でも、教材研究において事前に共同で題材を作成したり、学習指導案を立案したりすることによって、この教科の指導に対する自信を深めることができる。(20歳代 A 教諭)

図画工作科の授業研究において事前に共同で行う試作は効果的であることが分かる。

* 児童に対する理解や指導面でも有効であることを認識している。(30歳代 B 教諭)

* 図画工作科の授業研究を児童理解や学級づくりにまでつないで考え、肯定的に受けとめている。(40歳代 C 教諭)

図画工作科の授業研究を推進することで児童理解が深まる事が分かる。

* 学力をつける教科としての意識が高いことで評価の観点に対する自らの目標を高く設定している。(50歳代 D 教諭)

* 評価方法については、児童の活動中の評価資料の収集について困難さが残るを感じている。(30歳代 B 教諭)

図画工作科の評価に対して意欲的になる事が分かる。

* 学力をつける教科としての教科書の見直しの有効性を認識している。(50歳代 D 教諭)

教科書の内容を再考していることが分かる。

* 自己の表現技能の自信のなさに起因する評価に対

して不安を抱いている。(50歳代 D 教諭)

授業研究を経験してもなお、教員自身の表現技能に対する自信のなさが、この教科の指導に根強い影響を与えていることが分かる。

7. 図画工作科の授業研究のシステムの有効性

ここまでの分析の結果、図画工作科の授業研究の成果として挙げられることを、以下のように4点にまとめた。

(1) 授業研究の過程を通して、この教科が算数や国語などと同様に授業研究の俎上に載せられることを、教員自身が確認できる

こうした授業研究を経験することで、いずれの年代の教員も算数や国語と同等の教科であり、同じようにこの教科で付ける学力があるということを確認している。前述した竹内の研究では、美術における「評価」対象として、学習の成果としての「作品」のみの評価に終始している実態を示している。1985年に執筆されたこの教科に対する問題を示した論文の内容が、現在の聞き取り調査の結果と大差ないという事実がある。しかし、もし、この教科の授業研究を経験していなければ、上手な「作品」を完成させることのみで学力をつけるのではないことを意識することは難しかったということも言える。

(2) 教員の共同性が、図画工作科の授業研究システムを有効にしている

全校の教員で同じ研究テーマに基づき、常に共同で関わることが効果的に働いていることは明らかである。さらに、研究指定は公開授業と一体化されており、その成果は、学外まで広められる。

姫野による現職教員が小学校での同僚性や校内研究体制等についてどのように捉えているのかという調査¹⁸では、「個々の教員に授業力を高めようという意識がある」か、「教員間で授業や教材研究について話し合っている」か、という質問に対して、いずれも、「とても思う」と「やや思う」の合計が約90%を超えていると報告されている。

石原陽子¹⁹の新任教員対象の調査では、困難さを抱いた際に相談する相手として「同学年の先輩」という答えが一番多いと言う。

これらの報告では、特に教科を特定しているわけではないが、本調査において、図画工作科も同様に有効であることが確認できたと言える。

（３）図画工作科の指導を充実させることで児童理解が深まる

B教諭やC教諭のように図画工作科の授業研究に取り組むことによって、本教科における児童理解に通じていると実感しているという記述がある。

このことは、授業研究を通して図画工作科の評価についても研修を積む内に、児童の作品のみで評価を行わなくなったことを意味している。前出の竹内はこの点について、「そもそも美術（図画工作）科では、作品を評価するという観念そのものが希薄である。美術科における作品評価は、学習の結果としての評価ではなく作品の優劣判定である場合が多い」と述べている。しかし、「指導目標が明確でしかも授業者が児童・生徒の学習状態をよく観察している場合には、結果としての作品を評価したとしても、作品のなかに学習過程を読み取ることは可能である」と言う。

授業研究においては、「指導目標が明確」であり、「児童・生徒の学習状態をよく観察している」ことで、可能になってくるのである。

（４）若手教員の指導力育成に対する一助になる

20歳代のA教諭は、同僚教員からさまざまなことを学んでいることが聞き取り調査の結果から明らかであるし、それより上の世代の教員も若手教員の時代には、先輩教員に学んでいたことが聞き取り調査から判断できる。

その点について、山崎隼二は、「児童・生徒との交流経験から学び、先輩教師のアドバイスに導かれ、同世代の教師たちの人的ネットワーク支えられながら、『若手』教員たちは発達と力量形成を遂げていくのである」と述べている²⁰。校内授業研究を同僚と行うことによって、個々の教員の力量形成がなされるということである。

以上のように若手教員が指導力を育成していく過程においては、北田佳子も授業研究が彼らの研修意欲を高め、先輩教員との関わりを深めていくことを報告²¹している。

8. 図画工作科の授業研究体制の有効性と課題

この教科の指導において、図画工作科の授業研究の指定の有効性について、整理することができる。

「大学における図画工作科の理論と実技の指導を充実させることが重要であり、たとえそれが不十分でも大学を卒業後の自主的な研修の機会があれば意

義がある。図画工作科と他教科の授業研究の成果が補完し合うことで、一層研究成果が上がる。また、図画工作科の授業研究を推進することで児童理解が深まり、評価に対して意欲的になる。授業研究で教科用図書の題材を用いることで、その内容が再考される」。

しかし、問題は、「授業研究の指定を受けたからこそ」という表現がついて回ったことである。前述のようにこの指定校では、同学年で学習指導案を立てて検討し、試行の授業を他クラスで行い、学習指導案の見直しを図りながら、環境設定や教員の投げかけのことばなど、あらゆる細かい改善を加えながら、授業研究発表会まで進めている。もし、指定を受けなければ、50歳代D教諭の記述から分かるように、教員自身の表現技能に対する自信のなさが、教科観の確立や指導観に根強い影響を与えていることも予想できる。

また、研究対象の年齢構成を見ても、20歳代と50歳代の教員が学校の中心になって働かなければならない状況が続くことも前提に入れて、世代間の図画工作科の教科観の相違点を炙り出していくような研究も今後取り組んでいく必要があるだろう。

大学において、単に図画工作科の教科観について指導を十分に行うことが必要なだけでは終わらない。学校教育の現場において、同僚と行う授業研究の体制そのものが構築され、そのシステムが、維持されなければ意味がない。そもそもこのような研究を行わないと、小学校教育における本教科に対する意識は低いままであるという現実そのものを打破する必要がある。

おわりに

大学に勤務する筆者が、このような研究を遂行するためには、インフォーマントとしての研究対象校の教員とラポールをどう築いていくかという問題があった。

以下にこの研究を振り返って筆者がとった立場を整理しておく。

* 研究対象校に指導助言者として招いていただいた関係が前提である。

* 図画工作科の教科観や授業づくりに関する配慮事項を中心に学習指導案の作成や校内授業研究に参加しての指導助言を行う。

* 研究主題に関わる点には基本的には口出しをしな

いという姿勢をとる。

以上のような点に配慮しながら、図画工作科の専門家ではない先生（美術非専門教員）を応援するという立場を貫いたことで、聞き取り調査が実現できたと考えている。

（研究に協力してくださった対象校の教員の方々に心から感謝いたします。）

註)

- 1 平成23年度公立小・中学校における教育課程の編成・実施状況調査（A票）の結果について 文部科学省WEB ページ
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afieldfile/2012/01/31/1315677_1_1.pdf 2014. 4. 29 取得
- 2 教育公務員特例法21条 教育公務員は、その職責を遂行するために、絶えず研究と修養に努めなければならない。
- 3 「教材研究や授業研究，教師同士の相互評価といった取組は教師の資質の不断の向上にとって極めて重要である」「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」2008年，p142
- 4 豊田ひさき「日本の授業研究上巻授業研究の歴史と教師教育」日本教育方法学会，2009，p.11
- 5 同上，p12
- 6 The Teaching Gap, James W. Stigler, James Hiebert, Free Press 1999年, pp.121-127
- 7 ①問題の定義の段階・研究テーマの確認と，授業研究用の題材の決定・同学年部会による教材研究（教科書掲載作品の試作）による問題点の把握 ②授業の計画・学習指導案の作成・材料集め，用具の確認 ③授業・同学年教師による同一指導案による授業実施 ④授業の評価とその効果に関する研究・隣学年部会による授業検討会 ⑤授業の修正・学習指導案の見直し，及び，材料コーナーや作り方説明コーナーの設置 ⑥修正した授業をもう一度行う・研究発表大会における同学年教師による見直し指導案による授業実施 ⑦再び評価と反省・研究発表大会における地区内図画工作科部所属教師参加による研究協議会 ⑧結果の共有・研究記録の編集・次年度の研究に向けての課題決定

- 8 姫野完治「校内授業研究を推進する学校組織と教師文化に関する研究」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要第34号』2012，pp. 157-167
- 9 竹内博「美術（図画工作）科における授業研究の理念と方法 - 学習診断と授業評価」美術教育学第7号，1985年，pp. 100-107
- 10 安東恭一郎「事実学としての図画工作・美術の授業研究の基礎付け - 授業観察における現象学的態度の必要性」美術教育学第19巻，1998年，pp. 15-27，
- 11 竹内らが研究に取り組み論文を作成していた1985年（昭和60年）当時は，美術教育における評価研究は，推進されていたとは言い難く，評価に関する専門的文献は，3年後に相田盛二が「図画工作の評価」日本文教出版，1988年に出版した。
- 12 花篤實「コンクールにかかわっての作品主義という形式化や結果試行の中に，本来というか最初の目的なり理念を離れて一つの結果に向かって自立化して行く姿が，我が国のタテ社会というか閉鎖構造の中で緻密な競争原理が働き，理念や目的性を離れてひたすら一点に"磨き"を掛けていく独自の教育構造の姿に重なって，それなりに意味があったと思っている」「みがきの美学」『教育美術』第47巻，1号，1986年，pp. 54-57
- 13 研究対象校で行われていた試行の授業は「トライの授業」と呼ばれ，同学年および，隣学年の部会で授業提供者を中心に作成した学習指導案に基づいて，他クラスで行うものである。
- 14 大谷尚「4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案 -着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き- 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）54（2），2007年，pp. 27-44
- 15 SCAT Steps for Coding and Theorization 質的データの分析手法
<http://www.educa.nagoya-u.ac.jp/~otani/scat/>（2014年4月29日取得）
- 16 谷尚「4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案 -着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き- 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）54（2），2007年，pp. 34-38
- 17 本研究に協力してくださった教員の方々にそれぞれに研究同意書の内容を確認の上，押印してい

ただいている。

- 18 姫野完治「校内授業研究及び事後検討会に対する現職教師の意識」日本教育工学論文誌35, 2011年, p. 18
- 19 石原陽子「新任教員の困難に関する考察-質的・量的調査分析から-」 「プール大学研究紀要」第50号, 2010年, pp. 161-174
- 20 山崎準二「教師の発達と力量形成-続・教師のライフ・コース研究-」2012年, p433
- 21 北田佳子「校内授業研究会における新任教師の学習過程:「認知的徒弟制」の概念を手がかりに」日本教育方法学会紀要「教育方法学研究」第33巻, 2007年, pp. 37-48

(2014年 5月20日受付)

(2014年 7月 9日受理)